

人にわかるように言えたり、書いたりできる子

— 日記、特別活動などの指導を通して —

八 木 恵美子

1. 対象児のプロフィール

- (1) 生徒名 N・S (男) 昭和48年6月4日生 (中学部1年) 出生児の体重2,805g
3才児検査の時、ことばがなかった。家庭保育2年、O保育園4年、O小学校1年、U小学校2年～6年 (特殊学級)、現在に至る。
- (2) 医学的所見 情緒障害、精神薄弱
- (3) 諸検査の実態
WISC. 知能診断検査

	言語性	動作性	全IQ
昭和57年3月1日	52	85	64
昭和58年11月4日	45	61	44

(4) 性格行動上の特徴

- ① 恥ずかしがり屋で、人前では、まっ赤になってあがってしまい思うようにことばが出ない。
- ② やさしく、小さい子や友だちの世話をよくする。家事など、母親の手伝いを進んでする。
- ③ 学校では、活動的で休憩時間等、友だちとよく遊ぶが、家に帰ると、いつも一人でミニカーを持って遊んでいる。
- ④ 作業は、大変よくするが、学習中、少しでも困難な課題に直面すると、質問もしないで下を向いてだまってしまい、動かなくなったり、泣きだしてしまう。

2. 個人目標の設定

4月初旬は、朝の会の司会ができず、4月「しがつ」と言えないで泣いていた。また、小さい声で早口で言うので、他の生徒が、「聞こえません。」「もう一度言ってください。」等と言うと、教卓の中に入りこんでかくれたり、腹をたてて自分の席に帰って座りこんだりしていた。

教師には、よく話しかけるが、早口で助詞をとばして単語を並べて言ったり、主語・述語が逆になったりしてわからないことが多かった。例えば、学習中に、「指いたい」と言うので「どうしたの」と言うと、「さした、指、ほうちょうで、ぐさっと。」「血でた、きのうばん。」と早口で一気に言った。「橋本先生を来ています」とか、「山本君にあそびます」とか言い、朝顔の観察日記には、「きょう、本ばを出ました。」などと、助詞をまちがえて書いていた。

また、自分の言いたいことがうまく言えず、誤解されて、兄にたたかれたり、反対に、それで友だちをたたいてけんかになったりということもあった。

ことばは、あらゆる生活場面での対人関係を円滑に保つための手段として重要である。

N児は、仕事に興味を持ち、作業内容等も早く覚え、言われた仕事はまじめにするので、2年後に

は、希望すれば就職できると思う。しかし、わからないことが尋ねられなかったり、自分の思っていることがうまく言えなかったり、人にわかってもらえないで泣いたり、おこったりしては人間関係がうまくいかなくなると思うのである。

人にわかるように言えたり、書けたりできることは、N児が将来の社会自立をめざす上で、生きて働く力となり、対人関係の改善につながり、生活に、さらに活力を生ずるのではないかと考え、この研究と取り組むことにした。

3. 指導の重点と方法

- (1) N児は、友だちや教師に1対1ではよく話しかけようとするので、ゆっくり話を聞いたり、会話の時間を多く持つようにした。
- (2) 4日に1回の朝の会、帰りの会の司会では、大きな声でゆっくりと話す練習をさせたり、みんなの前で歌ったり、踊ったり、日記発表をさせて、しだいに人前で話すことに慣れさせ、自信を持たせるようにした。
- (3) 担任以外の先生方の所へ行かせ、用件をことばで言わせるようにした。
- (4) 日記では、書くことに興味を持たせ、進んで書くようにさせた。
- (5) 授業で、「いつ」「だれが」「どこで」「どうした」等の基本文型を、生徒の作品や、生徒がした動作をもとにして、繰り返し指導した。
- (6) ごっこ遊び、遊戯化、劇化などを多くさせた。生活の模倣・役割を演ずることにより、話しことばが確かになり、表現力も豊かになって、場面に応じた自然な会話や、行動がとれるようになってくると思ったからである。

4. 指導実践例

(例1) 日記指導を通して

中学部では、みんなが毎日、日記を書いてくる。N児は、4月新入学当初は、「忘れた」「書くことがない」などと言って、あまり書いて来なかった。書いて来ても、2、3行程度で書く内容が同じことの繰り返しが多く、右のようなものであった。

友だちと遊べないN児は、帰ったらすぐ1人でテレビを見るか、ミニカーで遊んでいるかで、毎日、同じような生活になってしまうのではないかと思った。

そこで、まず、日記を書いて来た時には、誉めて、「また明日も書いてきて知らせてね」とつけ加えるようにした。

また、朱書きの評の中に、書く題材の方向を示すようにした。また、事実の羅列に対しては、「だれがしましたか」「だれとしましたか」「それからどうなりましたか」「楽しかったですか」「何といいましたか」などと、教師の方で問いかけるようにした。ただ、だまって朱書きするだけでは見ないので、N児を呼んで、目の前で書いてやり、すぐ口で答えさせた。「N君が、今言ったこと

				た	は	ぼ	日記 の ま と め
				で	ま	く	
				す	し	は	
				す	た		
						あ	
					あ	か	
					い	し	
					し	を	
					か	た	

(4月)

また、N児に歌わせたり、S児に笑ったり、泣いたりさせ、繰り返し指導の機会をつくった。

(例4) 買い物ごっこを通して

正確に話を聞き取ったり、あいさつをしたり、会話に慣れさせようと、買い物ごっこをした。その中で、「いらっしゃいませ」「何にしましょう」「何をいくつかください」「いくらですか」「何円ですか」「ありがとうございました」などのことばを明確に言うようにさせた。やはりN児は、早口で言うので、ゆっくり言う練習をさせた。



また、電話注文もさせてみた。通話のできる教材用の電話で、遠くはなれてしてみたが、品物を見たり、相手がそこにいる方が話しやすいようだった。

5. 考察と反省

4月には、できなかった朝の会の司会も、5月6月とだんだん慣れてきて、大きな声ではっきりと言えるようになった。7月の中学部の諸寄臨海学校では、キャンドルフェイヤーの時の司会を進んでした。「上手にできた」と、先生方に誉められ自信がついたようだった。

また、1学期は、購売委員になっていて、毎週水曜日の当番の時には、「いらっしゃいませ」「何がいますか」「何円です」「ありがとうございました」などと、はっきり声をだしていた。

2学期には、放送委員会に入り、意欲的に活動している。

大山林間学校のキャンドルフェイヤーのだし物では、「つるの恩がえし」の「よへい」をやり、11月の学習発表会では、中学部の劇「一寸法師」のおじいさん役をこなした。

N児は、「よくわかるように言おう」と意識して言わせると言えるが、まだ、早口になり、発音もはっきりしないことが多い。

また、早く言いたい時に、主語・述語が逆になったりする。

6. 今後の課題

ことばが相手にわかるということだけなら、言語指導以前の人間関係が重要な意味を持つてくと思う。例えば、助詞が正しく使えないからと言っても、相手の心をわかってあげるといふ態度がことば以上にコミュニケーションに重要であると思う。

本研究は、このような前提に立って進めているのであって、その上で、更に、言語能力をより豊かに育つならと考えて取り組んできたのである。

従って、K児に対しては、今後もひき続き、会話の基本文型の指導や、発音指導をしていきたい。

また、正しい助詞の使い方、拗音、促音、拗音などの書き方を繰り返し指導していかなければならないと考えている。